

## 影姫道行歌

村井英雄

『日本書紀』卷第十六に「小泊瀬稚鷯鷯天皇」の条がある。武烈天皇の条である。「小泊瀬稚鷯鷯天皇」の「小泊瀬」は「大泊瀬」の雄略天皇に対する名前で、泊瀬は現在の奈良県桜井市初瀬辺の地である。大泊瀬の雄略天皇は初瀬の西の朝倉に宮を構えて宮号は泊瀬朝倉宮と呼ばれる。これに対して小泊瀬の武烈天皇は泊瀬列城宮ただなみのみやという。列城は地名で、『古事記伝』は長谷寺南の出雲村北方の御屋敷という地を比定している。また、「稚鷯鷯」は「大鷯鷯」である仁徳天皇と対になる用語である。なお、雄略天皇、武烈天皇、仁徳天皇の名はいずれも漢風諡号であるが、『日本書紀』編纂時に漢風諡号はないので、書紀本文に諡号による天皇名は記載されていない。後の写本に際して記入された天皇名である。

「小泊瀬稚鷯鷯天皇」の条は、稚鷯鷯が天皇に即位す

る以前の皇太子時代の話と、即位後の話から成立している。このうち即位前紀の記述は、その大半を「影姫あはれ」の歌謡で知られる物語で構成されている。この物語は稚鷯鷯が大臣平群真鳥の二男で鮪しびという恋人のいる物部鹿火大連あろかひの娘の影姫に横恋慕する話である。粗筋は次のような内容である。

影姫にひと目惚れした稚鷯鷯は、影姫と海柘榴市つばい（現奈良県桜井市金屋）の歌場（垣）で会うように家来を差し向ける。歌場は男女が歌謡でもって遊ぶ一種の求婚の様式で、関東でいうかがい耀歌である。その歌場にきた影姫に、稚鷯鷯は歌謡でもって、私の女になれと迫るが、影姫の恋人である鮪がやってきて、影姫は私の女だ、と歌う。また、影姫も稚鷯鷯を拒絶する。この事態に怒った稚鷯鷯は、家来の大伴金村連を鮪の家に差し向けて、鮪を乃

樂山で殺してしまふ。影姫は、鮪の死を知って、殺された現場の乃樂山まで涙ながらに歩いてゆくが、涙が目いっぱいになって、遂に歌を作つて次のように歌う。

石の上 布留を過ぎて 薦枕 高橋過ぎ 物多に  
大宅過ぎ 春日 春日を過ぎ 妻隠る 小佐保を過ぎ  
玉笛には 飯さへ盛り 玉盃に 水さへ盛り  
泣き沾ち行くも 影姫あはれ

記紀万葉の中の典型的な道行歌である。

影姫は、歌場本文中の歌謡「琴頭に 来居る影姫 玉ならば 吾が欲る玉の 鯁白珠」の歌意である「琴の音に引かれて神が影となつて寄ってくる」という意味を持つ美女である。また、鮪の殺された乃樂山は現在の平城山を指す。平城山は奈良県と京都府境付近に広がる丘陵地である。

「石の上」の歌は道行葬送歌である。後にこの形式が説教節の『小栗判官』や『太平記』の東下りなどの道行文を生み、江戸時代には近松門左衛門が戯曲としての道行を完成して、『菅根崎心中』や『心中天網島』などの道行場面を書く。現代に下つても、谷崎潤一郎の『吉野葛』や『細雪』にも道行は登場する。道行は日本文学の大きな要素を構成して上代から現在に至るまで脈々と生

き、日本人の心情の奥深くに入り込んでいる。その濫觴の一つが『日本書紀』の「影姫あはれ」である。

しかし、なぜ道行が発生したのかについては明確ではない。折口信夫は「叙景詩の発生」で、「遠処の神の、時を定めて、邑落の生活を見舞うた古代の神事の、神群行の形式が残つて、演劇にも、叙事詩にも、旅行者の風姿をうつす風が固定したものと考へて居る。記・紀の歌謡を見ても、道行きぶりの文章の極めて多いのは、神事に絡んで発達した為で、人間の時代を語る物も、道行きぶりが至る処に顔を出す事になつたのである」と記している。折口は、神がこの世に来臨する際に群れてやつてくる様が道行の発生だという。しかし、ここでは神群行とは異なつた観点から道行の濫觴を考へてみたい。

便宜上、「石の上」の歌謡を「影姫道行歌」と名づけて話を展開するが、影姫道行歌の中で最も問題となるのは歌い込まれている地名である。地名は道行の発生を考へる上で重要な要素であつて、記紀万葉の道行歌謡に地名がなぜ頻出するかが問題なのである。頻出の理由は、歩く道々の地霊や神霊を言挙げするため、と一般にいはれる。道を支配する神様の名を言葉で呼んで、神に挨拶し、通行の安全を祈願するのである。

要は地名が道行歌の生命となるのだが、影姫道行歌に登場する地名は、石上、布留、高橋、大宅、春日、小佐保の六つである。いずれも奈良県東北部の地名で、現在の地名に当てはめると、

石上―天理市石上

布留―天理市布留

高橋―奈良市杏町高橋

大宅―奈良市白毫寺

春日―奈良市春日山以西の地

小佐保―奈良市佐保川町

となる。

影姫は、天理市石上から歩いて布留、奈良市杏町高橋、白毫寺、春日、佐保川町を経て、鮪の死体のある平城山まで歩いてゆくと解釈されている。歩いた道は山の辺の道と考えられている。

「山の辺の道」の呼称については、『古事記』の崇神天皇記に「御陵は山辺の道の<sup>まがり</sup>勾の岡の上<sup>まがり</sup>にあり（紀は山辺道上陵）」、景行天皇記に「御陵は山辺の道の上<sup>まがり</sup>にあり」、また、『日本書紀』成務天皇紀に「大足彦天皇を倭国の山辺道上陵に葬りまつる」とある。これらの記述から六世紀から八世紀ごろには成立していたとみられる。この

以前の四、五世紀には大和平野東部に大和朝廷が建てられているので、当時の北に向かう<sup>みちまじ</sup>衾道などの道が、後に山の辺の道となったと考えられる。山の辺の道の全容は、最南端の起点というべき桜井市金屋から天理市石上を経て奈良市の平城山までである。このうち桜井市金屋から天理市石上までの道筋は確定しているが、天理市石上から奈良市までの道筋は不明である。全行程の距離は約二十五キロメートル。うち桜井市金屋から天理市石上までが約十キロメートルで、石上から平城山までが直線距離にして約十五キロメートルである。

影姫道行歌によると、影姫は山の辺の道の天理市石上から平城山まで、美しい食器に飯を盛り、美しい椀に水を容れて、泣きながら約十五キロメートルの道をとぼとぼと歩いたことになる。「とぼとぼ」と表現されているから恐らく半日の行程だったろう。

影姫はなぜ「石の上」から歩き出したのか。影姫道行歌は何の説明もしていない。影媛道行歌を掲載する『日本書紀』武烈天皇紀本文でも、「石の上」という言葉が出てくるのは影姫道行歌だけである。ところが、影媛道行歌は当然のごとくに「石の上」と歌い出している。

「石の上」という言葉を何の説明もなく歌謡の冒頭に置

くのは、文章構成上から考えても不具合の印象が強いが、その理由として考えられるのは、影姫と「石の上」が密接な関係にあった、ということである。古代の、当時の人々には影姫が石の上から出発してならん不思議ではなかったのである。その理由は次のようなことだろう。

影姫は五世紀末ごろの女性で、先にも記したように豪族の物部鹿鹿火大連の娘だった。物部氏は当時、天理市石上を根拠地にした武を司る氏族で、支配地は現在の天理市石上神宮の付近一帯である。石上神宮は朝廷の武器庫の天武庫あまのほくらがあったといわれる古社で、その武器庫を守っていたのが物部氏だった。影姫は物部氏の娘だからこそ鮪の死を知って、自らの住む石上から平城山へ向かったことを影姫道行歌は表している。影姫道行歌は、影姫といえは物部氏の石上という当時の人に周知の話を前提に歌い出されているのである。

折口信夫は、影媛道行歌のような道行ぶりの文章が登場した背景の一つを「古代の律文が予め計画を以て発想せられるのでなく、行き当たりばつたりに語をつけて、或長さの文章をはこぶうちに、気分が統一し、主題に到着すると言った態度のものばかりであった事から起る。目のあたりにあるものは、或感覚に触れるものからまづ

語を起して、決して予期を以てする表現ではなかったのである」と記している。影姫道行歌についても「かげ媛の自作ではなくて、平群氏に関係した叙事詩の中の断片か、或は他人の唯の葬式の歌か、かうした伝説を伴ふやうになつたのであろう。ともかくも、口に任せて述べて行く歌の極端な一例である」「道行ぶりも、畢竟は地名を並べる物尽しに過ぎない」としている。とすると、影媛道行歌の冒頭の「石の上」は行き当たりばつたりに歌い出された地名となるが、影媛の出自を考えると疑問であるのは、これまでに述べた通りである。

折口の説は一つの推定である。影媛道行歌で影媛が「石の上」から出発したのは、影媛が物部氏の娘であったことから推定だといえる。さらに「石の上」に続く地名も、目のあたりにある、或感覚に触れたものだから語を起こした、と考えるのは不自然である。影媛道行歌に出てくる地名は、適当に挙げられた地名ではなく、ある法則をもつて登場しているからである。

影媛道行歌に登場する地名は、大和平野東北部の天理市から北の奈良市に向かう順にたどっている。これらの地名は、石上、布留、小佐保を除いていずれも当時、大和平野東北部を支配する豪族の名前に該当する。古代で

は豪族名と地名が一致するのは当然であるが、影媛道行歌の中で豪族名でない地名の「石の上」と「布留」も、適当に口にただけの地名だろうか。

現在確定されている山の辺の道を、桜井市金屋から北上すると、天理市布留町にある石上神宮の境内に出る。山の辺の道は石上神宮の境内を通過して奈良市に向うのである。これは石上神宮と古代の道・山の辺の道が密接な関係にあることを表しているが、また「石上」と「布留」を切り離して考えられないことも同時に語っている。「石上」は「布留」の地にあるのである。

石上神宮は、崇神天皇の時に神剣を奉じる祠を建てたのが起源といわれる。祭神は「布都御魂大神」「布留御魂大神」「布都斯魂大神」である。祭神の名に見える「布留御魂」は物部氏の氏神の名前で、この「布留」が地名にもなった。布留の原義は「振る」で、神を呼ぶために神剣や布などを振ることから生まれた言葉である。また、「石の上」の語意は、「いそのかみ」の「い」が接頭語で、「そのかみ」は「古」を表すという（折口信夫）説がある。「石上」と「布留」という言葉は「そのかみに真剣を振って神を呼んだところ」の意味を持つ。語意からも「石上」と「布留」は密接な関係にあることが分

かるのである。

そこで影媛道行歌と同じように冒頭に「石の上」があり、続いて「布留」の言葉がある歌を探すと、『万葉集』の歌番号四二二番に次のような歌謡がある。

石上布留の山なる杉群の思ひ過ぐべき君にあらなくに

歌意は「石上の布留の山にある杉」である。現在の地籍とは逆転しているが、布留は石上の地の中にある。地域として「石上」と「布留」は同じである。影媛道行歌の地名も、四二二番の歌のように解釈すると、

石上の布留を過ぎ、高橋を過ぎ、大宅を過ぎ、春日を過ぎ、小佐保を過ぎ、

となる。

影媛は石上の布留から高橋、大宅、春日、小佐保と計四カ所の地を通過したことになる。現在の地名に詳しく当てはめてみると、天理市布留、石上、樺本、和爾、奈良市杏町高橋、白毫寺、春日山以西、佐保川町である。

先にも述べたが、山の辺の道の天理市布留の石上神宮から奈良市の平城山に至る確実な道筋は不明である。しかし、影媛道行歌に登場する石上、布留、高橋、大宅、春日を、現在推定されている山の辺の道の道筋に当ては

めてみると、いずれもが山の辺の道沿いにあつた古代豪族の根拠地である集落に当たっている。

当時、大和平野の東北部を勢力圏として押さえていたのは和珥氏だつた。影姫道行歌に登場する石上、布留地を勢力圏としていたのは物部氏で、この北隣りの地を支配していたのは高橋氏、さらに北隣りは大宅氏、その北隣りは春日氏である。これらの豪族はいずれも和珥氏と同族である。春日氏はこのほか、『日本書紀』垂仁天皇紀の一書に、一千口の刀を作つて石上神宮に収めた。

これが物部首の始祖になる、とあるので、春日氏は石上神宮と物部氏と密接な関係にある氏族でもあつた。また、影姫道行歌に出てくる地名で豪族名でない小佐保はどうかという、春日氏の勢力圏内の地で、乃楽山の入口の地である。つまり影姫道行歌に登場する地は、すべて影媛の属する物部氏と関係ある豪族の地ばかりである。影媛は「石の上」から鮪の死体のある「乃楽山」まで、出身氏族と関係深い地を順番に北へたどつて歩いたことになる。折口のいう「平群氏に関連した叙事詩の中の断片」とは言い難い。折口流に言うなら「和珥氏、あるいは物部氏に関連した叙事詩」となる。

影姫道行歌に歌い込まれた名称は、地名であると同時

に豪族の名でもあつた。そして、この地名は鮪のいる死世界へ至る道筋をも表している。単に思いつきや目に触れた地名だけを挙げたのではなく、鮪の屍のある死世界に至る行程と、豪族の支配地を通ることで、影姫が歩いた道程の距離も想像がつくようになっていいる。距離が分かるということ、時間も分かる。

具体的に影姫道行歌に従つて影姫の道行を追うと、先ず物部氏の根拠地である石上の布留を出発して、最初に高橋氏の支配地を通る。高橋氏の支配地の広さは、当時の人たちにはすぐに分かつたであろうから、当然、影姫が高橋氏の領域を歩いた距離と時間は推定できる。次いで隣接する大宅氏、その北に隣接する春日氏の領域を影姫は歩く。影姫の乃楽山に至るまでのすべての距離と時間が簡単に分かるのである。「行き当たりばつたりの、口に乗つた物尽し」ではない。しかも影姫道行歌は、乃楽山に至る一本の道筋を直線に近い道順で表している。最短距離である。南から北へ向かつて地名を順順に、整然と並べて詠い込み、影姫はその鎖状に連なつた関係豪族の支配地を歩いて鮪の所へゆくのである。

つまり、古代の人たちにとって影姫道行歌は、死世界への道の距離と時間を験にまごまごと浮かび上がらせる

歌謡であった。そして、影姫の泣きながら歩く姿に悲哀が醸成されるのは、死世界へ至る距離と時間が明確に記されているからだといえる。鮪の屍のある乃楽山に悲哀があるのではない。悲哀は死世界に至る道にこそ漂う。

話を近松の名作『曾根崎心中』の「徳兵衛おはつ道行」に移しても同じことがいえる。近松はこの道行で、名文といわれる死への道筋を延々と書く。近松はなぜそのような長い文章を書いたのか。それは観客の悲哀感を作り出すためだと考えられる。逆にいうと『曾根崎心中』は、徳兵衛おはつの二人が心中しなければならぬ明確な理由が観客には分かり難い戯曲なのである。影姫道行歌に照らしていうなら、影姫の鮪を殺された悲哀感と同質の「あはれ」は『曾根崎心中』には存在しない。二人が心中しなければならぬ理由には瑕疵があるのだ。観客は、二人が心中するのでなく、近松の他の作品に見られる「駆け落ち」を思い浮かべてもよいのである。しかし『曾根崎心中』に「駆け落ち」はない。徳兵衛は、世の禁を犯し、義理によって精神的に追い詰められはしているものの、まだ余裕があつて、影姫のような絶対の悲哀感の中にはいない。観客は徳兵衛とおはつの心中の明らかな理由が、すんなりと呑み込めないのである。そ

こで近松は死への道筋の時間と距離を表す長文、つまり徳兵衛とおはつはなぜ心中しなければならぬのかという観客の疑問を解消するため、文学的修辭を重ねたといえる。近松は、「徳兵衛おはつ道行」で情感という不合理世界を現出して悲哀感を演出し、観客をその情感世界に誘い込んで瑕疵をかわす一方で、観客の興味の方向転換をして、問題をなくしたのである。その情感世界を作り出す重要な役割を担ったのが、「徳兵衛おはつ道行」本文中の死世界への道筋を表す「橋尽くし」であり、死への残り時間を表現する「寺の鐘を鳴らす」道具立てであつた。

影姫道行歌の場合は、影姫が歩む道筋の地名を挙げることで、悲哀感と死世界に至る距離と時間が自然に表われている。もちろん影姫道行歌がそれを意識して作られた歌謡かどうか真偽は分からない。ただ、影姫道行歌が極めて短い歌謡でありながら、読む者に切々とした悲哀を催させるのは、地名の背後に死世界に至る距離と時間が隠されているからである。この意味からいうと、影姫道行歌に挙げられた地名と豪族の関係を熟知していた古代人の方が、紀を読んで歌謡として味わうだけのわれわれよりも、悲哀の度が深いのはいうまでもない。

道行の濫觴は、距離と時間の表現が重要な要素の一つであったといえるのである。

なお、近松の『曾根崎心中』の女主人公の名前の「おはつ」は、「影姫あはれ」の小泊瀬を示唆しているとも考えられるので、注意すべき点であろう。

#### 参考文献

- 『日本書紀』 岩波書店
- 『万葉集』 岩波書店
- 『近松浄瑠璃集』 岩波書店
- 『折口信夫全集』 中央公論社
- 『近代以前』江藤淳 文藝春秋

『日本の古代遺跡』

『新編国歌大観』

『出雲国風土記考證』後藤蔵四郎

『日本系譜総覧』日置昌一

『新校万葉集』沢瀉久孝 佐伯梅友

『上田正昭著作集』

『字訓』『字統』白川静

『万葉集歌人集成』中西進他

『山の辺の道』

『歴史読本』

『愛・空間・道行』橘正典

保育社

角川書店

大岡山書店

講談社

創元社

角川書店

平凡社

講談社

創元社

新人物往来社

構想社

(大谷大学助教授)